

## 食品添加物の不使用表示に関するガイドライン検討会

特定非営利活動法人 くらしとバイオプラザ 21 (※) 常務理事 佐々 義子

## 1. 消費者の「食品添加物の表示」への認識

異なるアンケートのデータですが、「食品添加物不使用」という表示があると「より安全で、健康によい」と思っている人は半数以上いるのに、食品添加物は国が安全性を評価したものだけが使われていること知っている人は3割強しかいません。さらに、「不使用」「無添加」表示は、食品添加物を全く使っていないととらえている人が2割弱もいます。このような食品添加物、無添加表示への認識は、明らかな誤認です。

## 2. 消費者の置かれている状況

料理研究家、家庭科の教員などから、「食品添加物は避けるべき」という発言が聞かれることは少なくありません。たとえ、これらの発言になんとか疑問を感じても、食品添加物の種類や機能は多様で理解が難しく、自ら説明し、反論するまではなかなか至りません。

私自身、着色料については、口紅、髪染めのように、生命に関わらなくても生活を豊かにする色素があることは体感してきました。おいしい香りの記憶は私たちに、豊かな安ど感を与えてくれます。しかし、保存料の役割を正確に知るまでは、保存料は日持ちを良くするより、新鮮でない食材を利用可能にする薬剤、というようなネガティブな印象を持っていました。保存料のお蔭で停電が続く被災地に食物を配ることができたり、飢餓の国の食料を届けたり、有効に食材を利用してフードロスを減らせたりすることまでは、気づかなかったのです。

世の中には、無添加と表示された食物を選ぶことイコール「食に対する意識が高い」「家族や自分の健康への配慮がある」と考える傾向があるように、私は思います。このような雰囲気の中では、食品添加物を使った加工食品は便利でお財布にも優しいわけですが、何気ないおしゃべりの中では食品添加物の利用を肯定しにくい場面もよく経験します。食品添加物がリスクだという科学的根拠はないに拘わらずです。

こういう雰囲気を醸成する背景には、「〇〇ない」という表示をみることで、「〇〇」が健康によくない、安全でないと消費者が学習してしまうからではないでしょうか。その根底には、天然、自然でないからという考え方があると思います。同様の傾向が遺伝子組換え食品やゲノム編集食品のリスクコミュニケーションの研究でもみられます。

食品表示を見るのが、最も高頻度に行われる食品をめぐる消費者教育の機能を果たしてしまっているといえるかもしれません。

### 3. 食料の安定供給の意義

食品添加物、農薬、遺伝子組換え技術は、世界中に食料を安定的の供給するために貢献している科学技術の成果であるのに、「無添加、無農薬、組換え不使用」と消費者から避けられる目印にさえなっています。最も大切なことは、安全な食料が安定供給されることです。いろいろなルールは食料が安定供給できる体制を守るために整備されていることも、より多くの消費者に周知される必要があると思います。

食品添加物の「無添加」「不使用」「〇〇ない」表示はやめて、食品添加物はリスクだという誤認が広がらないようなルール作りをお願いいたします。そして、食品添加物の役割、食料の安定供給の重要性が共有されるようなリスクコミュニケーションを継続して行う仕組みづくりも併せてお願いいたします。

※ くらしとバイオプラザ21 「バイオテクノロジーと生活」を切り口にした、サイエンスコミュニケーションの実践と対話の場づくりを行うNPO法人として2002年に設立されました。